

随想

人は、何に学ぶか

天野礼子

(アウトドアライター)

'76年大学文学部文化学科
美学及芸術学専攻卒業

大学の一回生になりたての頃に、美学の中川勝正（現・名誉教授）主任教授から「この四年間で、自分が熱中できる何かを見つけて下さい」といわれ、その頃覚え始めた釣りに没頭し、大学へは留年しない程度に通っていた。

アマゴ釣りから始まり、チヌ

釣り、グレ釣り、アユ釣り。アマゴ釣りも、エサ釣りからルーファイッティング、フライファイッティング。

四回生の秋、中川先生はおっしゃった。「天野君は、四年間、何をしていましたか。釣り？ほう、それで五十枚まとめられませんか」。

『魚拓の美術的意義』というのが私の卒論のタイトルとなった。中国から伝播した拓本という芸術は、江戸時代に庄内地方の武士達が武道の一つと位置づけた釣りの技量を競う証拠とす

るために発達した日本独特の技術であったが、当初は魚拓そのものの芸術性に価値を追求しなかった。それが、近年は色彩魚拓なども登場し、技法に芸術性が見い出されるようになっていく。写されている魚の大きさに意義があつた魚拓から、どんなに小さな魚であれ、それが美しく写されているかに意義が変わつたというわけだ。

卒業後も私は就職をせず、川・湖・海辺にさまざまな魚を求め、駆けまわつた。いつしか釣りに関するエッセイを書き始め、二十六歳の頃、作家開高健に師事した。「アメリカやカナダには、アウトドアライターという職業があり、中には女性もたくさんいる。日本にはまだこの名称を使う物書きは登場してないから、君は一閃の嚆矢となれ」というのが先生の言葉だった。

一九八八年。ダムのない最後の大河二つのうちのひとつ長良川

で、河口堰（河口ダム）の建設が始まることになった時、私は生まれて初めての反対運動に踏み出した。日本中の川を釣り歩いて、〃川の国〃ともいうべきニッポンにもはや誇るべき川が失くなつていくことを憂えたからだ。その運動の会長になつて下さるよう開高師に電話をした。「先生はもう十年以上、日本の川で釣りをされず、世界中を釣り歩いておられます。長良川を最後の川とお教えしても、まだニッポンの川から逃げ続けられるのでしょうか」。

「背」負うた子供に教えらるやナ。君は、川から学んだな。その生き方、応援しましょう」。この十二月、建設省は初めて、全国七つのダムの見直しを発表した。どうやら八年間の争いに、私が勝つたようである。それは〃川〃の声に耳を傾けたからだろ

ソンン神父さんのこと

有田典代

(関西国際交流団体協議会事務局次長)

1978年 大学文学部文化学科
文化史学専攻卒業

ソンさんは、ベトナム人の青年神父さん。静岡のカトリック教会に勤務しながら、全国の在住ベトナム人に向けて、情報誌『テイエン・ヴォン・クウェ・フオ(故郷の響き)』を発行している。

ソンさんが情報誌の創刊を思い立ったのは、阪神大震災がきっかけだった。被害の大きかった神戸市長田区には約四百八十人のベトナム人が暮らしていた。静岡から駆けつけたソンさんはボランティアらと被災ベトナム人救援連絡会議を結成。救援情報の伝達や行政側との交渉の通訳、不安定な生活を送る人々の相談などの活動を行って

いるうち、一世と二世の意識ギャップが大きくなっていることに気づいた。

祖国から身ひとつで日本にやってきた親たちは、生活を維持するために働くことに精一杯で、日本語が話せなかったり、子どもに母語を教える時間もなかった。一方、日本で育った子どもたちはベトナム語が話せなかったり、ベトナム料理を嫌がったりする。「ベトナム人であることを誇りに思えるようなことができたら」と考えたのが、情報誌の発行だった。

「親子で本を手にして、語りあってほしい」と、ベトナム語と日本語の併記で、ベトナムの歴史や伝統文化、伝えたい民話、童謡、高校生の作文などを掲載している。

日本が難民条約を締結し、ベトナム難民を受け入れるようになって十七年。現在、日本には約七千五百人のベトナム人が住んでいる。

ソンさんも十七歳の時、ポー

トビーブルとして出国し、日本定住を選んだ。コピー会社に勤めながら夜間高校に通い、猛勉強して上智大学神学部に入學、三十歳で神父になった。神父になったわけを尋ねると、「語りつくせない苦しみや悲しみ、悔しさを経験した。でも、いろんな人と出会い、助けられました。お返しをしたいと思ったとき、多くの人々に広い心で接することができるとして選んだ」と照れながら語った。

難民として来日した人たちは、ベトナムでのこと、難民生活について語ることは少ない。「けれど、日本人の多くが難民やベトナムについて誤解している。誰かが語らなければならぬ」と思った。なぜ、祖国と家族をあとにして日本に来なければならなかったのか。在住して十数年経っても難民として見られ、在住ベトナム人として接してくれない日本社会への問題提

起を」とも。

私は、新聞記者時代の取材や活動を通してたくさんのベトナムの人々と出会った。「生れた国が亡くなる」「親子が離れ離れになって生きる」という現実を十分理解できたとは思わないが、人間としての悲しみ、日本社会に求められる役割は痛感した。

私たちの社会には、インドシナ難民だけでなく、中国帰国者として、あるいは国際結婚などで定住を決めた人たちがたくさん住んでいる。こうした人々は、育った国との生活様式の違いや言葉の壁、法制度の壁、経済的基盤の不安定さ、子どもの教育、民族性の保持などさまざまな課題を抱えている。こうした人々が暮らしやすい社会をつくることは、実は日本人にとっても住みやすい社会を作ることになる。同じ時代に、同じ社会に生きるものとして、理解しあい、支えあっていける関係づくりが大切なことをソンさんは伝えていく。

脱藩

石井信平

(映像&出版プロデューサー、
石井信平事務所代表)

'66年大学文学部社会学科
新聞学専攻卒業

脱藩。ダツパンとは、世界中でたったひとりの自分に還ることである。

新島襄が函館から船出した時、幕府の秩序と安中藩の保護の一切から、彼は自己を断ち切った。脱藩とは、制度への反逆だから、以後いかなる藩からも受け入れられない事を意味する。二百六十の藩があった当時、日本という国はなく、新島はその時、帰るあてない旅立ちをした。

私は一九六六年、文学部社会学科新聞学専攻を卒業。筑摩書房に在籍。七八年、同社倒産により失業半年、テレビマンユニオンの入社試験をうけてテレビ

番組の制作に転じた。そして八九年、フリーになった。脱藩ならぬ脱サラをしたわけだ。新島襄とは次元も状況も違うが、HELPLESS、という点だけは似ている。

会社をやめて、最初に出会う二つの敵がある。収入の絶対的不安定と「孤独」である。

フリーとは、給料日がない。だが、出費は容赦ない。年金、保険、労災、事務所費、定期券：一切を自腹で調達しなければならぬ。企画や取材をするのも、もちろん自腹である。打ち合わせをして、コーヒー代に困ったこともある。

孤独は、ひとりで食事する寂しさに象徴される。東京、赤坂に個人事務所をもったが、昼になっても「メシ行こか」と声掛ける同僚がない。一日中、コトリとも電話が鳴らない日がある。だから、こちらから電話を掛ける。すると、必ずこう聞き返される。

「どちらの石井さんですか？」
つまり所属している会社、組織、団体の名前を名乗れというわけだ。私は答えられない。

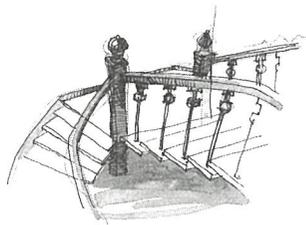
個人や個人事務所にお金を貸してくれないのが日本の銀行だ。土地、建物、目に見える資産を担保にして初めて貸してくれる。そうして迎えた事態が、国家的規模の財政と金融の破綻だった。なぜ、この国では「個人」ではダメなのか？個人の企画、野心、志に投資しようと思わないのか？

フリーとは賃労働者だ。やっただこと」にだけは支払われる。

しかし企画や「考えたこと」、つまりソフトウェアには相手は金を渋る。これが社会からダイナミズムと「おもしろさ」を奪っていないか？

資産と知名度がない個人が、いかにサバイブするか。私は日々、自分を材料に実験しているようなものだ。新島ほど命懸けではない。法の裁きに怯えることもない。法の保護を受けることもない。つまり気楽が、財産であり特権である。

新島先生、渡るに船なく、目指す水平線を見失ったとき、我れを助け給え。



「オウムの本」も あります

伊藤昭治

(大学文学部嘱託講師・阪南大学教授)

公共図書館の使われ方も変わってきた。昔は利用できる資料は所蔵している資料だけでした。そのため蔵書の多い図書館がよい図書館でした。しかし今は違います。所蔵していなくても要求すれば、購入したり、

また他館から借りて提供してくれます。

そのため最近では、どうせ読み捨てにする流行の本だから自分で買うのは止めて図書館で借りようとか、批判するのに調べなければならぬがこんな本買うのは癪だ、図書館の本で間に合わそうといった使われ方になってきました。

『オウム真理教』の本も『マドンナの写真集』も『完全自殺マニュアル』も『タイ買春読本(全面改訂版)』も要求があれば図書

館で収集してくれます。

しかし新聞をはじめとするマスコミの多くはこれには批判的で、「オウム真理教の本を置いて市民が信者にでもなったらどうするのか」とか『完全自殺マニュアル』を読んで自殺する中学生が出て図書館は責任がないと言えるのかとか、「図書館の本は税金で買っているのだから、マドンナの写真集は税金で買うに値する本か」「『タイ買春読本』は買春を奨励している本です。図書館から廃棄してください」などといった論旨で糾弾してきます。

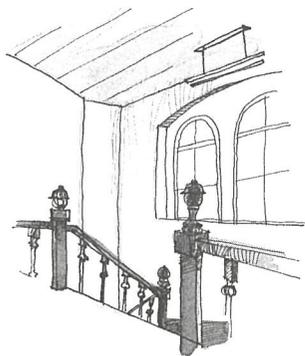
皆さんはこうした批判をどうお思いでしょうか。わたしはこうした批判を受け入れてはならない使命が公共図書館にあることを皆さんに判っていたいただきたいのです。

図書館には良書のみを収集すべきだという意見もあります。良書だから図書館で購入しているのだとも思われています。し

かし図書館は何が良書で何が悪書か、という判断を下す権限は持っていません。また所蔵しているからといって、その図書の主張を公認している訳でも評価している訳でもありません。

図書館は市民の知る権利の保障機関であり、情報公開の最先端なのであって、なにかの権威のシンボルではありません。図書館によって提供される資料の価値判断をするのは利用者自身でしかあり得ないのです。図書館に多様な資料が集められるのは、利用者が自由に判断が下せるようにすることにあります。

今、図書館に求められている役割は、かつてそうであったような思想善導といった目的で、特定の価値を市民に植えつけていくことではなく、あらゆる見解を収集し提供することにあります。図書館の書架から、特定の本を除く運動に加担しないでください。



大学で思想形成

小野 憲

(附)日本マンパワー代表取締役・
㈱キャリアスタッフ代表取締役)

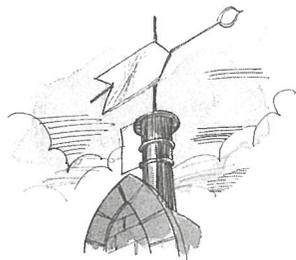
54年大学商学部卒業

大学で身に付けた一番大きな事は、今考えると物の見方、考え方を教わった事だと思っている。大学に入學し、一般教養で住谷悦治先生の経済学を受講し、先生の人柄に接し、マルクス経済学の歴史的な分析、社会的な物の見方、考え方を教わった。昭和二十五、二十六年にかけての朝鮮事変が終わり、米ソの対立が一段と激しくなり、労働運動も活発な時で、学内でも学生運動が盛んな時であった。商学部の授業の中でも岡村正人先生の「経営学総論」は、住谷先生と並んで学生の人気講座であり六〇〇人位入れる教室にぎっしりと満員の授業であった。

先生の株式会社金融論は、非常にしっかりした理論で今読み返してみても教えられる本であった。三年になってゼミナールで岡村先生の指導を受け、私の発表の際に「資本主義における株式会社発生史」を大塚久雄先生の「株式会社発生史論」だとか、渡多野鼎著の「経済学入門」だとか、佐々木吉郎先生の「経営学入門」だとか、ろくに読んでもいないのに知ったかぶりしてゼミナールで報告したが、岡村先生に誉められ80点頂いたのを覚えている。その頃から色々教えを受けている島弘教授は、助手でマルクス経済学も近代経済学もどちらにも精通されていた。同じく三年の時、商学研究会の幹事になり、指導を受けていた今井俊一先生の所へお窥いすると、一冊の文庫本を出されて「この本は素晴らしい本だよ。この考え方を身に付けると色々な問題解決が出来るよ」と奨められたのが毛沢東の矛盾論実践

論であった。早速、その本を書き写し、パンフレットを作ると今井先生から「折角パンフレットを作るのだから、きちんとした立派な物を作りなさい」と怒られた。矛盾論実践論は、哲学書なので何しろ難解で一度二度読んでスーッとわかる本ではなかった。社会へ出てから実務に携わり、仕事をする心構え、姿勢として矛盾論の「主観性、一面性、表面性を排す」とか、幾つもの問題に直面して頭が混乱した時に「まず主要矛盾を見つけて出し、主要な側面をつかんでその解決に全力を尽せ」とか、弁証法の具体的な適用として仕事の問題解決に役に立つものが多い。そのような事から矛盾論実践論を今までに一〇〇回以上読んだ。そして読む度に自分の仕事、会社の経営に当てはめて、この事はここに当てはまるのではないかと考えたものである。実践論についても、私の仕事が会社員、次に経営コンサルタン

ト、そして三十五歳から会社経営と変わったが、理論と実践の統一、知と行の統一が仕事を進める上で大切で、どうしても空理空論になりがちなので、この本を読んで反省する機会が得られたと考えている。自分の思想形成において弁証法の理論づけを行ない、どのように経営生活に具体的に適用するかということ、アメリカのプラグマチズムの理論、例えばパースジェイムスの本を読んで、これをどう弁証法に結びつけるかということを自分の課題にしている。



私と同和教育

勝島千鶴子

(高等学校教諭)

私は昭和二十二年の生まれである。物心ついた頃は今とは違い部落差別は周囲に露骨に存在していた。中学の頃、クラスに長欠の生徒がいて心が痛んだ事を今も鮮明に覚えている。これらの古い体験が、教師になって同和教育に関わりたいと願った私の原体験である。

私が同志社高校に就職した一九六九年はくしくも「同和对策特別措置法」が施行され、「部落問題が国民的課題」として動き出した時であった。京都では府立高校や郡部ですでに同和教育の取り組みが行われていたが、京都市内私学はまだ未開拓の状態であった。残念ながら準備段階には関われなかったが、

一九六九年春京都私学同和教育研究会が結成され結成時には会員となる事が出来、私の教師としてのスタートに同和教育の取り組みを加える事が出来たのは幸いであつた。同和教育はむしろ部落問題の解決に資する為の教育であるが、この教育運動は私に教育そのものを見る多くの視点を与えてくれた。「生徒の学習権の保障」「進路を保障する事の重要さ」「生活の実態の中から教育課題を見ていく事」「親の願いに応える教育」等々。これらの視点を日々の教育活動の中で生かされ続けているか自分に問い続けている毎日である。

さて私が教師として同和教育に取り組み出して二十七年がたとうとしている。この二十七年間の部落問題の置かれた状況の変化は大きなものがある。最新の総務庁の調査においても、実態的差別はほとんど解消しつつあり、心理的な差別の面でも民主主義的、近代的考え方の浸透

とともに解消の方向性を示している。私の経験においても若者の目には部落差別はもうある意味で「今頃何故そんな事を言うの」という対象になりつつある。それは昔から言われている「寝た子を起こすな論」とは全く違う。教えられるから偏見を持つというのではなく、教えられると今頃そんな古くさい事をという違いのような気がする。その変化はもちろん多くの人々の努力の中で培われた成果である

が、それを踏まえた上で、同和教育は、長年の同和教育運動の中で獲得して来た視点を大切に、社会の構造的変化の中で今教育現場の中に起こっている新たな人権の課題「生徒の人権認識は正しく発達しているか」「生徒が真に大切にされているか」等を追求する人権と民主主義の教育としての側面を強めていかなければならないと今私は思っている。



四字熟語

デビット ゾペテイ

(テレビ朝日記者兼ディレクター、
芥川賞候補作家)

'90年 大学文学部文化学科
国文学専攻卒業

言葉の密林を彷徨い、文章が思うように書けない時、私は気分転換に四字熟語辞典を開いたりする。四字熟語というのは様々な知恵の泉であり、なかなか面白い。ところが、時々少し恐いやつに遭遇する。

例えば、日本語には「竜頭蛇尾」という言葉がある。字の通り、頭は竜のように立派だが、尾は蛇のごとく貧弱である。はじめは勢いがよくて派手だが、終わりの方がばつとせず、格好もよくない。そういう意味の例えだ。

フランス語では、これを「魚の尾鰭おびらに終わる」という。同じ発想だね。体がどんなに立派で

も、魚の尾鰭は細くて薄く、つかみどころがない。表現方法は微妙に違っていても、人間の考える事は大体同じだな、としげしげ感心するのである。

我々凡人の日頃の志、青春時代の恋愛、政治家の公約、スポーツ競技など、世の中には竜頭蛇尾的に終わるものは実に多い。

そこにはいくつかの共通した原因がある。最初の方で突っ走りすぎて、途中で息切れをする。「ビギナーズ・ラックの逆風」と

でも呼ぶべき現象もある。最初のうち運を全部使ってしまった、あとの方で何も残らない。成功への求心力が少しずつ弱くなり、軌道修正もきかぬまま、目指すものからどんどん離れていく。いろいろあるが、挫折の理由はなんであれ、「竜頭蛇尾」とは本当に嫌な概念である。

私はこの頃、この言葉に少し怯えている。軽い気持ちで書いた小説が昨年の暮れにある文学

賞を取った。新聞の批評には「文壇での鮮やかなデビュー」と、実に鮮やかな事が書いてある。様々なところから取材が来る。原稿の依頼も殺到。それまでも優しかった編集者は、いつの間にか醜い鬼に変わり、次回作の執筆を迫る。嬉しい悲鳴を上げたい有様だ。

しかし、私は嫌な予感がしている。この大きな渦の中に、いつか溺れてしまうのではないかという、そう、まさに「竜頭蛇

尾」の予感である。

派手なスタートよりも、私はレースの終盤で勝負をかけた。『竜頭蛇尾』を狙う性格かもしれない。だから今、いささか不安な気持ちだ。「竜頭蛇尾」という言葉が私の四字熟語辞典にはないからな。

しかし、なるようにしかならない。深刻に悩んだところで何が始まるわけではない。私はそう思う。気儘が一番。

「気儘一番、ね。」



コメコメクラブ

山田厚史

(朝日新聞編集委員)

’71年大学法学部政治学科卒業



ふくらした粒々の、あの弾力ある歯ごたえ。かみしめるたび口に広がるほのかな甘み。「ごはんのおいしさはこれなんだ」と言っても、「ライスはそのままで食べてる気がしない」と、塩やソースを振りかける外

国の友人がいる。バターやジャムを塗って食べるパン、ソースにからめるスパゲツティーなどにくらべ、白米のメシは欧米の舌には淡白すぎるのかもしれない。

コメを食べる人はアジアに20億人ぐらいいて、世界にも広がっているが、5キロ袋で三千円もする日本のコメは、国際商品にはならない。おいしいコメ作りに丹精こめる農家の仕事は、日本人の味覚と、輸入を制限する行政の保護があつて成り立ってきた。

銀行に就職した友人は成績優秀だった人が多い。能力のある人が集まり、サービス残業までして懸命に働き、資本力もブランドも立派なのに、日本の銀行は国際競争力がない、といわれる。「お役所の保護で利益が出る仕組みになつていたからね」。銀行に勤める友人がため息まじりにいう。ぬるま湯のような保護は、その意に反して、育つべき能力の芽を、摘んでしまうことが多い。

学校には序列があり、有名校に入るには厳しい競争がある。だが、授業の自身を「国際基準」に照らすと、果たしてどれほどのものなのか。世間で言われるランキングもこの国だけで通じる尺度ではないのか。

「日本のジャーナリストも、コメではないか」とこのころ思う。日本語という強力な防波堤がめぐらされている。外から侵入できない反面、こつちからも出て行けない。国内に大きな市場が

あるから外に出ていく必要もない。忙しく働いているのは銀行員と同じだが、世界に通用する能力が磨かれて来なかったのも銀行と同じだ。

日本の男性は、女性に比べると国際社会での人気は低いように思う。仲間うちで群れるのは企業社会の習性かもしれないが、人を楽しませるコミュニケーションへの配慮が足りない、と言われる。「メシ、フロ、ネル」に象徴される寡黙さが良しとされてきた風土も影響しているのかもしれない。日本にいる限り、ほぼ同数の女性がいるが、日本の男もまた「コメ」かもしれない。

人気バンドの米米CLUBが解散した。われらコメコメクラブもそろそろ卒業しなくては。